

フランス中世文学を巡る雑感



忙しい、走り続けているグローバルの世の中であって、時には古典文学をゆつくり読んで、今とかなり違った価値観のある世界を考えてみるのもよいのではないかと思う。たまたま朝日新聞夕刊（二月六日、六頁）にドナルド・キーンさんが「人間国宝展——生み出された美、伝えゆくわざ」のシンポジウムで基調講演した記事が目についた。「芸術家は過去の作品からどのようにインスピレーションを得て、新しい作品を作るのか」と問題提起し、それには決して変わることはない美の真理「不易」と時代にあわせ革新性のある「流行」との二つの原理があると主張した。文学の世界においても、これと同様なことがいえるのではないか。作品の古いものと新しいものとの相互関係について、特に「伝統」や「伝承」について考察すべきであろう。今回、いずれも勝れた力作揃いのぶあつい翻訳集『フランス中世文学名作選』（白水社）を前にして、中世英文学を専攻し翻訳にも関心がある一人の読者として、感謝をこめて本書を読む道

案内役を勤めたい。

(一)



書は纏め役松原秀一、天沢退二郎、原野昇編訳に、篠田勝英、鈴木寛、福本直之、細川哲士、横山安由美が加わって、九名による十三作品の多彩な作品の翻訳集である。これを読むに当たって一番のガイド役は、それぞれの作品の冒頭に付けられた「解題」と「訳注」である。それを十分理解するために、まず中世ヨーロッパ文学研究の背景について語っておこう。

西ヨーロッパの中世は「ラテン中世」とよく言われている。人びとが生活する「キリスト教共同体」の意識である。古代ローマ文化遺産とローマのキリスト教を引き継いで、大聖堂と修道院が文化保存の基地となり、後にパリ大学などが重要な役割を演ずる。聖書研究が中心ではあったが、知的共通語のラテン

池上 忠 弘

語ができたので古代ローマ文学もよく読まれていた。ただ作品の読み方はどうしても中世的になってしまふ。古典を尊重する立場なのでラテン語作品は重要な種本となり、それをどのよう
に活用するかが大切なことになった。

中世の「本」Bookはすべて手作りの職人芸の産物である。

注文に応じて作られた高価で貴重なものだった。今日われわれが知っている紙を使う活字印刷は十五世紀中頃マインツで始まるので、ずっと後の中世末期になる。原作者の書いた原稿に相当するものはほとんど存在しない。十四世紀末チヨースー時代の詩人トマス・ホックリーヴ Thomas Hoccleve の自筆写本などは例外的である。作者名が分らない作品が多く、名前が分つたとしてもその人物については詳しいことはよく分らない。作品名も近現代になって付けられた場合が多いが、古仏語作品についてはタイトルが付けられているのが多そうだ。要するに、現存する中世の本は羊皮紙vellum(上質)、parchmentに書かれた写本manuscriptである。学のある専門職字生scribeが書き写したものであり、さらに写本彩飾師illuminatorが装飾を施し絵を入れたりして製本されると上等な芸術品になる。

こういう写本を元にして、一般読者に扱いやすく、読みやすくするため「本文」*base*を作ることになる。原作に近い写本を探り出し、それを底本として、古い中世の文字使用を避けたり近代文法の句読点をつけたりしたテキストを作る。これが翻訳に使われる「校定本」critical (revised) editionである。以上述べてきた基礎的作業が研究者には必須なので、語学、文学、哲学、

文化、歴史を含む「文献学」philologyを扱う者という基本的姿勢を取ることになる。

(二)

次に中世の文学作品について簡単に特色を述べておこう。詳しいことは、『フランス文学講座』全六巻(大修館書店)や原野昇(編)『フランス中世文学を学ぶ人のために』(世界思想社、二〇〇七年)、あるいは英米でよく出ているCompanionとかHandbookなどを是非参照してほしい。

人びとが「ヨーロッパ」という意識を持つようになったのは十五世紀中頃かららしいが、中世の主要な文学作品は伝統的に韻文*verse*——詩で書かれていた。一方、散文*prose*は実用的な用途のために使われ、「聖書」の翻訳から始まったといわれている。ただ次第に散文で作品が書かれることが多くなっている。本書で翻訳されている作品の大部分は詩で書かれており、五点が本来の形を示しているが、長篇物語* 四点は現代の散文体に訳されていることにご注意いただきたい。使われた詩形は典型的な八音節平韻*octosyllabic couplets*で、行末二行ずつ脚韻を合わせ妙技を示す。詩を書いたり、声を出して読んだり、吟唱したりする人はジョングルール、トルバドゥール、トルヴェール、ミンストレル、クレリック*cleric*と呼ばれている。

古来いわれているが、作家である詩人*poet*は多分中世の学問の基本七学を修め、ラテン語ができる学僧・学者*clericus*であ

ろう。教会・行政の用語であるラテン語と地域性の強い、日常生活で使われる言語「俗語」vernaculaire（英語、仏語など）とは区別されている。われわれが通常扱っているのは「俗語」の文学である。古代ローマ文学ではウエルギリウスとオウイディウスが最もよく知られ、尊重されていた。物語を作る種本はラテン語か古いフランス語で書いたもので、詩人はそれを利用して新たに古仏語で作品を作る。題材は十二世紀のJean Bodelが『サクソン族の歌』冒頭で語っている。フランスもの（武勲詩で、シャルマーニユ関係）、ブリテンもの（アーサー王物語群）、ローマもの（テーベ、エネアス、トロイなどの古代ロマンス）である。主題は愛 amour に関するものが圧倒的に多い。聖なる方は聖母マリア崇敬に向い、世俗の方は上層貴婦人への求愛——宮廷風恋愛となる。

私の専攻している中世英文学では、ノルマン・コンクエスト以後、イングランドが大陸のフランス文化圏に入ってしまったので古仏語文学探索は必須の分野だと考えている。ラテン語・古フランス語の作品が「英語」で書く主要な種本となる。アングロ・ノルマン語も存在する。十四世紀に至って漸く英語の威力が回復する。チョーサーは仏文学から更にトレチェントのイタリア文学——ダンテ・ペトルルカ・ボツカッチョを尊敬しながら、積極的に活用している。

(11)

さて、本書は『フランス中世文学集』全四巻（白水社、一九六〇

一九六〇年）を受け継ぎその第五巻を目指して多様性に富む意欲的な編集がなされたものである。解題や訳注を見て気に入ったものからゆつくり読むのがよいだろう。これから目次に従って私のコメントを記していこう。

①クレテイアン・ド・トロワ『フィロメーナ』（天沢訳）、②同上『愛の神』論（天沢訳） 作者は中世仏文学では最もよく知られた物語詩人で、①はオウイディウス『変身物語』第六巻を元に膨らました初期の作品。アテネ王の娘二人の運命がトラキア王テレウスの欲望に翻弄され、その復讐にもえた女二人が息子を殺して相手に食べさせる残酷行為をし、奇跡的に三人は三羽の鳥に変身する話。②は夫婦愛のトルヴェール詩人が『愛の神』のなされ方に批判的で、特に至純の愛 *innamours* に反論する。

③トルバドゥール（瀬戸訳）、④トルヴェール（瀬戸訳） ③は南フランス十人の詩人を選びそれぞれ一篇の抒情詩を提示。訳者の説明が入念になされている。地中海世界、イスラームにも接し、作詩しメロディをつけた詩は知的恋愛ゲームを歌い、相手に貴族夫人を配した。④はトルバドゥールの影響を受けた北フランスの詩人たち六人。論争詩二篇が入っているが、既婚夫人に仕える形をとり、全体的には軽快でさらっとした感觸の詩。

⑤ヴァース『アーサー王の生涯』*（原野訳） Brutus をブリトン族王家の祖先とし、七世紀から歴史と虚構を交えた創作のラテン語年代記としてジェフリ・オブ・モンマスが『ブリタニア列王史』（二一三八年頃）を書いた。これを元にしてジャージー出の学僧ヴァースがアングロ・ノルマン語で『ブリュ物語』*Roman*

de Bru (二一五五年)に翻案(物語化)し、パトロンのヘンリー二世王妃アリエノール・ダキテーヌに捧げた。この仏訳本は中英語頭韻詩 *Layamon's Bru* (c.1200) の種本にもなった。『ブリュ物語』は一五〇〇〇行にも及ぶ長大な詩であり、本書ではアーサー王関係の所だけを訳出したもの。「円卓」を創設し、戦闘場面の描写を生々しく、港湾に詳しく、モルドレと対戦後アヴァロンへ重傷を癒しに行つたアーサー王がまた戻ってくる余韻を残した。この作品の強い影響を受けたのがクレティアン・ド・トロワのアーサー王物語である。ここから巨大な物語群が始まつた。

⑥ロベール・ド・ボロン『聖杯由来の物語』(横山訳) クレティアン・ド・トロワの『ベルスヴァル』が未完で終わつた後、次の段階で十三世紀初頭、騎士で作家でもあつたボロンが聖杯の来歴を扱う *Roman de l'Estoire dou Graal* を書いた。ピラトのやとわれ騎士でありながら隠れたキリストの弟子アリマテアのヨセフは、磔刑の十字架から下ろされた主の脇腹から流れる血を最後の晩餐の時の卓にあつた杯に受け、それを隠しておいた獄中にいたときキリストが現われ、驚くヨセフにその杯を手渡し予告する。聖霊の聲に導かれ、シモンの家で新しい卓を備へ、その上に魚、ついで聖杯「グラアル」を置くように言われ、その後に妹の夫(漁夫王)ブロンとその子アラに聖杯の管理が委ねられる。最後の晩餐の卓とアーサー王の円卓との間に漁夫王の卓が据えられたことになる。

⑦ユオン・ド・メリー『反キリストの騎馬試合』(篠田訳) 一

二三〇年頃のアレゴリー教訓物語。善徳と悪徳の騎馬合戦で、クレティアン・ド・トロワとラウル・ド・ウダンへの言及が目立つ。語り手(私)は騎士の姿で紛れこみ、ブルターニュの森で対戦が開かれる。その前日の夕食から始まる。(希望)町を基地とする天国の王軍と(絶望)町を基地とする(反キリスト)軍団双方の陣容が、善きキリスト者の敵将からはじめて擬人化騎士たちに加えて古代の神々と異教徒も次々と延々と詳しく描写される。次に天国の王軍になると、神から天使、聖人、善徳にアーサー王円卓騎士団も含めて紹介される。両軍には女性騎士たちも参加している。合戦の条件が合意されるとすぐ試合がはじまる。悪戦苦闘しながらもやはり善徳軍の方が勝利し、試合は終わる。その後祝宴が開かれ、負傷者の治療が行われる。(私)も愛神ウエヌスの矢を深く受けて治療を施され、信心への道に導かれる。めちやくちやに見えるが、意外とユーモアがあり、風刺や批判があつてなかなか面白い。

⑧ジャン・ルナール『ぼらの物語』(松原訳) 同時代の『薔薇物語』と区別するため、ふつう「ギヨーム・ド・ドル」と呼ばれている。若い皇帝コンラッドが吟遊楽人ジュグレから高潔の騎士ギヨーム・ド・ドルとその妹美女アリエノールの噂話を聞いて恋に落ちる。反対する家令の邪魔が入り、女性の貞操を賭けて(彼女の太腿にある赤い「ぼら」状の痣がポイント)漸く結婚に至る優雅な話。ゆつたりと濃かに語られる宮廷風物語で、著名な詩人の抒情詩や流行歌がちりばめられ、平安朝の歌物語を思わせる。一番楽しかった読み物である。

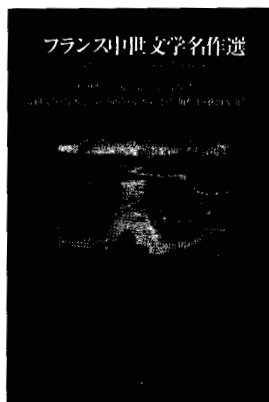
⑨作者不詳『アラスのクルトワ』（鈴木訳）十二世紀初頭の世俗ドラマ。少数の役者が対話体で演じる芝居らしい。主題はルカ伝十五章「放蕩息子の帰還」を扱っているが、主人公クルトワを中心に、宿屋の中の酒場での会話、一文なしになつて家に帰ってくる当時の風俗点描がおもしろい。

⑩アラン・シャリティエ『「れない姫君」』（細川訳）*La Belle Dame sans merci* (1424) はシャルル七世の側近、王室公証人・秘書官であつたシャルチエ（一三八五頃—一四三〇）の中でも最もよく知られた詩。発表されるや宮廷内で大反響をよび、英語、カタロニア語、イタリア語の翻訳がすぐ現われた。英文学でも後のロマン派詩人たちが大きな関心を寄せた。一途な（恋する男）と徹底的に受け入れる余地のない、“*merci*”のない（姫君）との対話については、本詩の訳のあとにある十頁におよぶ「訳注」と相談しながら考えるのがよいだろう。中世文学理解についての大切な指摘が沢山みられる。

⑪伝ピエール・ド・ボーヴェ『動物誌』（福本訳）、⑫リシャール・ド・フルニヴァル『愛の動物誌』（福本訳）、⑬マルボード・ド・レンヌ『金石誌』（福本訳）今日の自然科学の源にある古代ギリシアの『フィシオログス』博物誌の流れをくむもの。⑪は一二四六—一六七七年作成の *Bestiaire* 全七二章から六章を訳した動物を通して自然史と図像化されたキリスト教義を伝える。様々な動物の習性を説明し、中世人がそこから得た道徳的宗教的象徴を論じたもの。⑫は十三世紀の聖職者で外科医でもある博識な作者が自分の宮廷風恋愛論として相手の貴婦人に向つて

いろいろな動物の習性を当てはめながら自分の気持を伝えている、興味深い話。⑬はレンヌ司教でもあつたマルボード（一〇三五—一二三三）の書いた薬石論として広く知られている *De lapidibus* の翻訳。ラテン語とアングロ・ノルマン語訳をそえたテキストを使用。ダイヤモンド、エメラルドなど十六点を選んで訳出されている。それぞれの宝石の薬効が記されているのが特色である。

以上解説してきたが、やはり作品自体を読んでいただくことが肝要である。小型の「中世フランス文学案内」や *Oxford World's Classics* のような小型本、叢書が必要となる。外国文学を研究する者としては、若い頃から多くの洋書の翻訳を読み洋画を観たりして育ってきた。その恩恵を今でも強く感じている。本書のような良い本を読み、一層外国文学をわれわれの目から見てじっくり観察していきたい。さらなる続刊を期待しています。



「フランス中世文学名作選」
松原秀一/天沢退二郎/原野昇 [編訳]
四六判、520+2頁、本体 6200円
白水社、2013年 9月 15日刊